

牧会書簡はパウロをどこまで継承しているか

— 「善い行ない」に見る著者の戦略的意図¹

To what extent do the Pastoral Epistles succeed Paul?

— About the author's strategic intent in 'good works'

樂 満 大 樹*

Daiki RAKUMAN

問題の所在

3通の手紙（I テモテ書、II テモテ書、テトス書）からなる、いわゆる牧会書簡²は、紀元後60年頃に推定されるパウロの死後、およそ半世紀経った後に書かれた擬似パウロ書簡である³。

パウロの死後からこの書簡の成立時までの間、教会の状況は目まぐるしく変わった。牧会書簡の著者は、パウロの名を騙って書簡を執筆する以上、パウロの思想を何らかの形で継承していると考えられる。しかし著者や読者が置かれた状況はパウロの活動時のそれと異なるため、牧会書簡はパウロ以外の様々な影響を受けていると推測される。そしてその1つとして、書簡成立時である紀元後100年前後のギリシア・ヘレニズム世界からの非常に強い影響が考えられる。この影響は、牧会書簡で多出する「善い行ない」（*ἔργον*

* らくまん だいき 神学研究科神学専攻博士後期課程
指導教員：須藤 伊知郎

¹ 本稿は、2023年3月24日に西南学院大学で行われた「2022年度 日本基督教会九州支部会」における研究発表内容に修正を加えたものである。なお、本論考の基になっているものは、2019年3月に広島大学大学院総合科学研究科において提出し受理された修士論文であり、これを大幅にアップデートしたものである。修士論文の執筆において、丁寧に指導いただいた辻学先生（広島大学大学院教授）に、この場を借りて、改めて心からの感謝を申し上げる。なおテキストの翻訳は、特に断りがない限り私訳による。

² 牧会書簡（Pastoral-Briefe）という呼び名は、P. Anton（1753）に遡ると考えられる。詳しくは、Schnelle（2017），403参照。

³ 牧会書簡を擬似パウロ書簡とする立場をとるか否かを巡って、研究者の間で意見が分かれているが、本稿は以下の理由から牧会書簡を、紀元後100年前後にパウロの名を騙って執筆された「偽名書簡」とする立場をとる。（1）牧会書簡内に紀元後90年代以前には見受けられない語彙が現れていること（例えば、*ἐτεροδιδασκαλεῖν* [異なる教えをすること；I テモ 1：3；6：3]、*ὕψηλοφρονεῖν* [高ぶること；I テモ 6：17] など）、（2）牧会書簡内に現れる教会職制（「監督」、「長老」、「執事」、「やもめ」）がパウロの時代のものとは一致しないこと、（3）パウロ的な神学的概念（「自由」、「十字架」、「キリストの体」など）が現れないこと。以上3点に関して、辻 [2003]，321-324頁；327頁および辻 [2013]，158-161頁参照）。これらの事情から、我々は牧会書簡をパウロの真筆書簡として考えることができない。本稿においては、「パウロ」を騙った人物がパウロの手紙を模倣して著したことを前提とする。

καλόν, ἔργον ἀγαθόν)⁴という表現においても当てはまる。「善い行ない」という概念は、ギリシア・ヘレニズム世界でも一般的に用いられていた⁵。一方、パウロは「行ない」よりも「信仰」を重んじており、ἔργον ἀγαθόνは真正パウロ書簡において4回現れるだけである⁶。このことから、「善い行ない」という概念は、非パウロ的なものだと考えられるのだが、しかしパウロ書簡にも少しとはいえ見受けられる以上、全くの無関係だとも言えない。その点から牧会書簡における「善い行ない」は読者に、ギリシア・ヘレニズムの概念として響いていたのか、あるいはパウロ的概念として響いていたかについて、意見が分かれている。

例えば I. H. Marshall は、「牧会書簡における〔善い行ない〕という概念は、回心や霊的回心の経験から起因する活動または奉仕の生活を描いているパウロ的な型として表される⁷と主張する。Marshallはこのように、牧会書簡の「善い行ない」にパウロ的概念が強く反映されていることを強調する⁸。

他方、T. B. Williams は、「著者のキリスト教的倫理観と、より広い社会の倫理的基盤の間にある共通点を強調すること⁹が、著者によって「善い行ない」という概念の中で行われていると言う¹⁰。Iテモ 6:19 において「善い行ない」は「待望された永遠の命の獲得を手助けする点で重要な鍵となって」¹¹おり、この点で「善い行ない」はユダヤ教文献で見られる「救いとしての応報の視点に近い」¹²という。また彼は「著者のヘレニズム哲学に対する知見が、特にストア派やプラトン派に対して深く広がっている」¹³点を指摘し、「善い行ない」の表現は「一般的なヘレニズム的用語のキリスト教的枠内における概念の変換を反映している」¹⁴と主張する。彼は、牧会書簡の著者が「善い行ない」の使用によって目指すものは、キリスト教的倫理観とギリシア・ヘレニズム世界の倫理観を繋ぐ架け橋のようなものであると考えている¹⁵。

以上のように、研究者の意見は大きく2つに分かれている。簡単にまとめると、次のようになる。

(1) 牧会書簡の「善い行ない」は、パウロ的概念を基にしたキリスト教的要素の反映された結果である。

(Marshall, Towner)

(2) 牧会書簡の「善い行ない」は、キリスト教的倫理観と、牧会書簡の著者と読者が置かれたギリシア・ヘレニズム世界の倫理観の間を繋ぐ役割を果たしている。(Williams)

(1) と (2) の共通点として、「パウロ的な『善い行ない』という概念を基にしたキリスト教的倫理観の反映」が挙げられる。ただしこのパウロ的「善い行ない」に関する研究者たちの意見が若干曖昧で定まっていなると考えられるため、真正パウロ書簡の用例をも含めて再考察する必要がある。

⁴ ἔργον καλόν が Iテモ 3:1; 5:10, 25; 6:18; テト 2:7, 14; 3:8, 14, ἔργον ἀγαθόν が Iテモ 2:10, 5:10; IIテモ 2:21; 3:17; テト 1:16; 3:1。

⁵ 後述(本稿第2章)参照。

⁶ ロマ 2:7; 13:3; IIコリ 9:8; フィリ 1:6。

⁷ Marshall (2004), 228. なお、亀甲括弧内は本稿筆者による。

⁸ また Towner (2006), 210-212は、牧会書簡をパウロの真筆としながら、「パウロは活動期間の中で信仰生活を描くための表現を用いる際、または応答する際、信仰や救いの結果として『善い行ない(すべての善い行ない)』を語る」(212)と主張し、パウロ自身が描いていると Towner が考える牧会書簡の「善い行ない」も、その同じ線上に存在していると考えられる。以上のように Towner も、牧会書簡の「善い行ない」にパウロ的要素を強く見て取る。

⁹ Williams (2014), 161。

¹⁰ *Ibid.*, 161. また彼は Iテモ 5:24-25や 6:17-19から読み取れる「来たる世界における良い基盤」の積み重ねという考え方は、「福音書で共通であり、初期ユダヤ教文献に通じる根を含んでいる」(156)と言う。

¹¹ *Ibid.*, 156。

¹² *Ibid.*, 156, n. 63. なお、ユダヤ教文献の該当箇所は、IVエズ 8:33; シリア・バルク 14:12など。

¹³ *Ibid.*, 152。

¹⁴ *Ibid.*, 155。

¹⁵ *Ibid.*, 161。

(2) だけに該当する点としては、パウロ的要素の他に「牧会書簡が置かれた環境としての、ギリシア・ヘレニズム的倫理観の反映」という要素が挙げられる。この主張は、牧会書簡がギリシア・ヘレニズム世界の影響を強く受けているという一般的に浸透している考えから見ても、十分に可能性のある主張である。ただし、どのようなギリシア・ヘレニズムの概念が、そしてその概念がなぜ牧会書簡の「善い行ない」に持ち込まれたかの理由について Williams も答えることができていないため、このことを明らかにする必要がある。我々は、以上のような研究の現状を踏まえ、牧会書簡の「善い行ない」に関する問題を積義的な考察を通して明らかにしたい。

第1章 真正パウロ書簡における「善い行ない」

真正パウロ書簡に *ἔργον ἀγαθόν* は、ロマ 2 : 7 ; 13 : 3 ; II コリ 9 : 8 ; フィリ 1 : 6 の4回現れる。一方で、*ἔργον καλόν* はパウロ書簡内に現れない。*καλός* と *ἀγαθός* は新約聖書の用語法ではほとんど同義であり、この二語は相互に代替できるが¹⁶、*ἔργον καλόν* がパウロ書簡に現れないことは注目に値する。この課題については後に考察を加えたい。ここでは特に2箇所を扱いたい。

(1) ロマ 2 : 7 (2 : 6-8)

。〔神は〕彼(人々)の行ないに従ってそれぞれに報いとして与えるだろう。⁷すなわち〔神は〕「善い行ない」における忍耐に従って栄光と名誉と不滅を求めている者に永遠のいのちを、⁸闘争心に〔かられ〕真理に従わず、不正義に従う者には怒りと憤怒を〔与えるだろう〕。

ロマ 2 : 7 の *ἔργον ἀγαθόν* に関して、前後の文脈から、終末時に神から与えられる永遠のいのちという応報の基準として捉える解釈が一般的である。U. ヴィルケンスは、詩篇 61 (62) : 13 LXX¹⁷の「そして恵みは、わが主よ、あなたのものだ、ということ。人に、その業に応じてあなたが報いる、ということ」(岩波訳)という考え方が、ローマ 2 : 7 の根底にあると指摘する¹⁸。パウロは2 : 6の「〔わざに従って〕報いとして与える」という動詞の未来形 (*ἀποδώσει*) によって、やがて訪れる終末時¹⁹にそれぞれがなした「善い行ない」、そして探し求めた栄光と名誉と不滅の度合いに従って、返報としての「永遠のいのち」が与えられることを示している。また5節に現れる *ἡμέρα ὀργῆς* (怒りの日)²⁰は、終末の日を示している。こ

¹⁶ Wanke (2015), 295頁参照。同頁において Wanke は代替できる箇所として、I テモ 2 : 10 と 5 : 10、テト 1 : 16 と 2 : 7、エフェ 2 : 10 と ヘブ 10 : 24 など を挙げている。ただし、元来 *καλός* は、「どちらかといえば賞賛すべき行為において現れ出る善を表して」(同書、295頁) おり、他方 *ἀγαθός* は、「どちらかといえば心的態度とそれに基づく倫理的価値」(同書、295頁) を表している。また、*καλός* に関しては LSJ, 870 A III. 1, 3、*ἀγαθός* に関しては *Ibid*, 4 A I. 4 も参照。

¹⁷ なお、箴 24 : 12 にも同じような内容が含まれている。

¹⁸ ヴィルケンス (1984), 174頁参照。また Zeller (1985), 65 ; Lohse (2003), 100 ; 川島 (2010), 83頁、クランフィールド (2020), 77頁参照。川島はこの詩篇の箇所について、「終末論的報復」というユダヤ教の根本見解だと指摘する (83頁)。

¹⁹ Dunn (1988), 92は、*ζητέω* (探し求める) が現在分詞であるため、終末というゴールに達しておらず、まだその確信に至っていない様子が現れていると主張し、この箇所ではパウロが未来的終末思想を考えていることを根拠づけている。ただしパウロの終末思想には、同じローマ書の箇所であるロマ 13 : 11b 以下、「あなた方を眠りから起こした時はすでに〔来たことを〕。私たちが信じた時よりも、今や救いは私たちに近づいている」、あるいはフィリ 4 : 5b 「主は近くに〔いる〕」からも分かるように、「すでに」と「未だ」という思想が緊張感を持って含まれている。このため、この箇所の未来形だけを取って、パウロが未来的終末思想を考えているとは言えないだろう。したがって Dunn の主張には、全面的には賛成できない。これらの箇所についての示唆は、2023年2月24日の須藤伊知郎氏からの口頭の教示による。

²⁰ ヨブ 20 : 28 ; 21 : 30 ; 詩 110 : 5 ; 箴 11 : 4 ; 哀歌 2 : 1 ; エゼ 7 : 19 ; ゼファ 2 : 2, 3、およびルカ 21 : 23 ; I テサ 1 : 10 参照。

の怒りの日に行われる「正しい裁き：δικαιοκρισία」（5節）において、神は「『善い行ない』における忍耐に従って栄光と名誉と不滅を求めている者には永遠のいのちを」（7節）、「不正義に従う者には怒りと憤怒を」（8節）与える。そしてこれらは、6節の ἀποδώσει（報いとして与えるだろう）が示すように「報い」として与えられるのである。従ってこの箇所ของ ἔργον ἀγαθόν は終末時に神から与えられる応報の基準として現れていることが分かる。

(2) II コリ 9：8

8 神はあなた方へ向けてあらゆる恵みを期待以上に与えることができる。それであなた方は、いつでもあらゆる点で、あらゆる充満を得ながら、あらゆる「善い行ない」へ向けて期待以上に満たされることができる。

この箇所を含んだ8-9章の文脈は、パウロが献金問題について叙述した文脈として理解される。この箇所の ἔργον ἀγαθόν は文脈上、献金のことを指していると考えられる²¹。ただし、同じ文脈上の6節、また11節に見受けられる表現²²から、「『よいわざ』は単に献金のいわば代名詞として使われているのではなく、パウロは献金者の心の持ちようまでも含めて『よいわざ』を理解している」²³との解釈もある。この解釈は、パウロがあえて ἔργον ἀγαθόν という言葉に「献金」の意味を持たせていることから、パウロが単純に物質としての献金だけを表そうとしていないという意味で蓋然性が高いものとも言える。またパウロの献金運動自体に、イザヤ書やミカ書等に現れる²⁴終末論的救済の完成としての「異邦人によるシオン巡礼」の思想を読み取ろうとする試みもある²⁵。パウロは異邦人の救いに関して「アブラハムとの契約」²⁶を根拠にしており²⁷、このことからパウロが献金運動に終末論的な要素を含めていた可能性は十分に考えられるだろう。我々の箇所の ἔργον ἀγαθόν には「[物質的な] 献金」、そして「献金者の心の持ちよう」という意味が含まれると考えられ、さらに終末論的な要素も根底に存在していると言えるだろう。

以上、真正パウロ書簡に現れる ἔργον ἀγαθόν について分析した²⁸。その結果、特徴的なこととして、パ

²¹ 佐竹（2017），240頁参照。

²² 6節「それでこのことを〔言う〕。乏しく播く者は乏しく収穫するだろう。しかし祝福の上で播く者は祝福の上で収穫するだろう」、11節「〔コリントの人々が〕すべてにおいて豊かになり誠実になり、その誠実さは私たちを通して神への感謝を実現する」。

²³ 佐竹（2017），240頁。

²⁴ イザ2：2-3；60：1-7；61：6；66：18-20；ミカ4：1-2；ゼファ3：10など。

²⁵ 佐竹（2017），354-356頁参照。佐竹をはじめとする研究者はパウロ自身がこれに類する発言をしていないこと、パウロの終末思想が含まれるロマ10：19、および11：13-16には献金に関する言及が含まれないこと等を根拠として挙げ、この主張を退けている（佐竹 [2017], 355頁；Downs [2016], 3-9, 161）。しかしながら、かれらの主張は視野が狭いと言わざるを得ない（このことに関して、2023年2月24日に須藤伊知郎氏からの口頭での教示により示唆を受けた）。確かに、かれらが挙げるロマ10：19；11：13-16には献金に関する言及はないが、そもそもこれらの箇所は献金に関する文脈ではないし、後述するようにパウロは異邦人の救いに関して「アブラハムとの契約」を考えているため、パウロが献金運動にシオン巡礼を考えていたとする方が自然なことだと思われる。

²⁶ 創12：3；18：18；22：17, 18, 26：4；28：14など。

²⁷ ガラ3：8, 14。

²⁸ その他の2箇所においても終末論的な要素が見受けられる。フィリ1：6では、「キリスト・イエスの日」という表現、あるいは ἐπιτελέσει（完成させるだろう）という未来形の動詞が用いられていることから、終末論的な要素が含まれていることが分かる。他方ロマ13：3では、支配者の権力に従順であることを示す文脈からしても、基本的には世俗的な倫理に関連すると考えられるが、その後の12節の「私たちは闇の行ないを捨て、光の武具を身につけようではないか」という表現との関連性から考えるならば、多少なりとも我々の箇所が終末論的な要素を含んでいることが分かる。以上のようにパウロにおける「善い行ない」には終末論的な要素が含まれている。なお、以上の2つの箇所に関しての詳しい考察は別の機会に譲りたい。

ウロは *ἔργον ἀγαθόν* にはすべての箇所において「終末時の救いとの関連」を、その程度は多少異なるにしても含めていることが分かった。

では、なぜパウロ書簡には *ἔργον καλόν* は一度も現れず、*ἔργον ἀγαθόν* しか用いられていないのだろうか。我々はパウロが前提としている「初期ユダヤ教」²⁹、特に 第二神殿時代における思想を考えたい。E. Ottenheijm や M. Sheldon が明らかにしているように外典³⁰や偽典³¹、クムラン文書³²やフィロン³³、あるいはヨセフス³⁴において応報思想としての「善を行う」を表す כּוּן נַשּׂא という言葉、それに準じるギリシア語での「善い行ない」、あるいは具体的な「善い行ない」の内容がすでに現れている³⁵。このように、特に 第二神殿時代を中心とした「初期ユダヤ教」の中にも応報としての「善い行ない」という思想が見受けられることが分かる。パウロの思想はユダヤ教的な要素から多く影響されていると考えられるため³⁶、パウロの「善い行ない」に関わる思想が「初期ユダヤ教」からのものであることは十分に考えられる。そのため、パウロが *ἔργον ἀγαθόν* しか用いないのは、*ἔργον καλόν* とするならば *καλός* の元来の意味から見た目の「善い行ない」というニュアンスになりかねず、応報思想としての「善い行ない」を表すためにも、彼は *ἔργον ἀγαθόν* のみを使用しているのだろう。

第2章 牧会書簡における「善い行ない」

牧会書簡の中に「善い行ない」という表現は、全部で14回現れる。そのうち *ἔργον καλόν* が 8 回³⁷、*ἔργον ἀγαθόν* が 6 回³⁸である³⁹。ここでは、14箇所を5項目に分けて分析する。

(1) ギリシア・ヘレニズム的倫理観に基づく「善い行ない」

(ここではテト 3 : 1 を取り上げる。他に、テト 2 : 7。)

テト 3 : 1

1 あなたはかれらに、諸々の支配や諸々の権力に服従し、従い、あらゆる善い行ない (*ἔργον ἀγαθόν*) に対して準備をすることを思い起こさせよ。

²⁹ この「初期ユダヤ教」という言葉は、研究上の用語である(大貫 [2019], 17頁参照)。この用語に関してはさまざまな議論がある。しかしながらここでは紙幅の関係上、十分な考察は不可能である。この議論についての詳細な考察は別の機会に譲るとし、ここでは便宜上、括弧付きの「初期ユダヤ教」とする。なお、本稿で扱う「初期ユダヤ教」は特に断りのない限り、第二神殿時代を中心としている。

³⁰ 例えば、トビ 4 : 1-21 ; 12 : 7b-10 など。Ottenheijm (2008), 488-491 ; Sheldon (2015), 4-5 参照。

³¹ 例えば、IV エズ 7 : 34-35, 77 ; アリステ 127 ; 231 ; 272 など。Ottenheijm (2008), 491-494 ; 499-500 ; Sheldon (2015), 11-12, 17 参照。また、終末時における応報思想に関しては、IV エズ 8 : 33 を参照。

³² 例えば、共規 (1 QS) 1 : 2, 5 など。Ottenheijm (2008), 487-488 ; Sheldon (2015), 16 参照。

³³ 例えば、供え物 53 ; 夢 2.34 など。また、Ottenheijm (2008), 495-496 ; Sheldon (2015), 13-14 参照。

³⁴ 例えば、古誌 3.223 ; 4.231-239, 275, 276 など。Ottenheijm (2008), 497-498 ; Sheldon (2015), 14-16 参照。

³⁵ なお、*ἔργον καλόν* と *ἔργον ἀγαθόν* を表す כּוּן נַשּׂא はヘブライ語聖書中には現れない。

³⁶ ガラ 1 : 13-14 ; フィリ 3 : 5-6 など。

³⁷ I テモ 3 : 1 ; 5 : 10, 25 ; 6 : 18 ; テト 2 : 7, 14 ; 3 : 8, 14 の 8 回である。そのうち I テモ 3 : 1 が単数形であり、その他 7 回が複数形の「善い行ない」である。

³⁸ I テモ 2 : 10 ; 5 : 10 ; II テモ 2 : 21 ; 3 : 17 ; テト 1 : 16 ; 3 : 1 の 6 回。そのうち I テモ 2 : 10 のみが複数形であり、その他 5 回が単数形の「善い行ない」である。

³⁹ なお「善を行う」を表す動詞 *ἀγαθοεργέω* が I テモ 6 : 18 に現れるが、紙幅の関係上この動詞は対象外とし、直接的に「善い行ない」という単語として現れる 14 箇所を考察対象としたい。

ここでの「善い行ない」は、支配者たちや権力者たちに「従う」という倫理的な、生活上の教えに連なっており、直後の2節には倫理的な教えが続いている。これらの教えは、牧会書簡全体を通して言われている、牧会書簡の信仰的な教えに関する内部、そして外部からの信頼性の獲得（Iテモ 3：7；5：10）へとつながるだろう。辻学が指摘するようにこの箇所はロマ 13：1以下を基に構成されていると考えられる⁴⁰。すなわち、このことは、「支配」（13：1）、「権力」（13：1）、「服従」（13：1, 5）、あるいは「善い行ない」（13：3）といった言語的な一致からも分かる。また我々の箇所の「善い行ない」は *ἔργον ἀγαθόν* であり、前述したようにパウロの「善い行ない」も *ἔργον ἀγαθόν* のため、この箇所において著者はパウロの「善い行ない」を継承しているとも言えるだろう。

(2) ギリシア・ヘレニズム的倫理観に基づく要素がキリスト教的に変換された「善い行ない」

(ここではIテモ 3：1および5：10 [bis] を取り上げる。他に、Iテモ 2：10；テト 3：8。)

Iテモ 3：1⁴¹ (3：1-7)

¹この言葉は信実である。監督職を求める者は「善い行ない (*ἔργον καλόν*)」を熱望する。²すなわち非難の余地がなく、1人の妻の夫であり、しらふであり、自制心があり、秩序正しく、よそ者を愛し、教えることができ、³酒を飲んで暴力的にならず、ふさわしく、争わず、貪欲でなく、⁴自分の家の先頭に良く立ち、あらゆる誠実さを用いつつ従順の中で子どもたちを生活させ、…⁶新しく植えられた人でなく、…⁷外部から良い証言があることを望むのである。

Iテモ 5：10

¹⁰ [やもめとして登録されるのは、]「善い行ない (*ἔργα καλά*)」を用いて証言されている人でなければならない。例えば、子どもを育て上げたとか、部外者を受け入れたとか、聖なる者たちの足を洗ったとか、苦しんでいる人々を助けたとか、あらゆる「善い行ない (*ἔργον ἀγαθόν*)」に従ったとか。

3：2-7と5：10には「善い行ない」の具体的内容が並べられており、これらの箇所は牧会書簡の「善い行ない」の中でも特徴的である⁴²。

3：2-7までに現れる具体的な「善い行ない」をまとめると、以下のようになる⁴³。

- 1、ἀνεπίλημπος (非難の余地がない)
- 2、μῆς γυναικὸς ἀνὴρ (1人の妻の夫)
- 3、νηφάλιος (しらふである)
- 4、σώφρων (自制心がある)

⁴⁰ 辻 (2019), 75-76頁。

⁴¹ Marshall (2004), 227に、単数形の *ἔργον καλόν* はテト 3：1に現れるとあるが、これは明らかな表記間違い。

⁴² 3：1の *ἔργον καλόν* を「良い仕事」(=監督の職)と解すべきか、「善い行ない」(=人間としての振舞い)と解すべきかは議論のあるところである。大抵の邦訳は「良い仕事」と訳している(聖書協会共同訳、新共同訳、口語訳は「良い仕事」、岩波訳と新改訳2017は「立派な働き」とし、いずれも「良い仕事」を指す。他方、田川訳は「良い行動」、辻は「良いわざ」と訳しており、「善い行ない」を指している)。しかし、「良い仕事」と訳した場合、後続する3：2-7との関係がよく分からなくなる。しかしながら「善い行ない」と訳すならば、後続文との繋がりがはっきりと分かる(辻 [2017], 76-77頁参照)。

⁴³ なお、3：6の *μὴ νεόφυτος* (新しく植えられた人でない) は、この箇所で「新しく回心した人でない」ことを表しているが、「善い行ない」とはならないため、除外した。この箇所に監督の条件として *μὴ νεόφυτος* が現れている理由は、新しく回心した人には3：2以下に並べられている様々な徳を持ち得ないためであると考えられる。

- 5、κόσμος (秩序正しい)
- 6、φιλόξενος (よそ者を愛す)
- 7、διδακτικός (教えることができ)
- 8、μὴ πάροινος μὴ πλήκτης (酒を飲まず、暴力的にならない)
- 9、ἐπιεικής (ふさわしい)
- 10、ἄμαχος (争いをしない)
- 11、ἀφιλάργυρος (貪欲でない)
- 12、τοῦ ἰδίου οἴκου καλῶς προϊστάμενος (自分の家の先頭に良く立つ)
- 13、τέκνα ἔχοντα ἐν ὑποταγῇ, μετὰ πάσης σεμνότητος (あらゆる誠実さを用いつつ従順の中で子どもたちを生活させる)
- 14、μαρτυρίαν καλὴν ἔχειν ἀπὸ τῶν ἕξωθεν (外部から良い証言があることを望む)

以下、これらのものから特徴的なものをいくつか挙げたい。

κόσμος (秩序正しい) は κόσμος (秩序) の形容詞形であり、ギリシア・ヘレニズム世界で秩序正しい様子を表す美德として描かれている⁴⁴。

ἄμαχος (争いをしない) は、生活の中で平和を保つために必要とされる美德としてギリシア・ヘレニズム世界で考えられている概念である⁴⁵。

τοῦ ἰδίου οἴκου καλῶς προϊστάμενος (自分の家の先頭に良く立つ) は牧会書簡で、教会職に対して度々用いられている⁴⁶。他方、この表現に基づく概念はギリシア・ヘレニズム世界においても見受けられ⁴⁷、この概念が国政や他人を導く際に重要視されていたことが分かる。

μαρτυρίαν καλὴν ἔχειν ἀπὸ τῶν ἕξωθεν (外部から良い証言があることを望む) における「外部」は、ギリシア・ローマ世界のことを指し、著者はこの教会外の人々によく見られ、良い証言があることを望んでいる。周りの世界からよく見られることは、教会を安全に保つことに繋がるからである。

以上のような具体的な「善い行ない」は、どれも元来は社会的倫理観に即した善行であり、キリスト教的なものには含まれていない⁴⁸。このように、3：2-7に並べられた社会的倫理観に即した「善い行ない」を、著者はキリスト教の枠組みの中へ持ち込んでいる。

他方、5：10の「善い行ない」をまとめると、以下のようなになる。

⁴⁴ LSJ, 984 B; H. Sasse (ThWNT III), 896-897; Neuer Wettstein (2001), 872-873; Dibelius (1977), 53; VGT, 356 A によれば、リュシ阿斯21.19; 26. 3; クセノポン『ソクラテス言行録』872; プラトン『国家』329 d; ルキアノス『二重に訴えられて』18など多数。

⁴⁵ LSJ, 78 A; VGT, 25 B によると、アリストファネス『リュシストラテ』253; プラトン『メネクセス』240 d; アイスキュロス『ペルシア人』90; 『アガムメノン』733; クセノポン『キュロスの教育』6. 1. 36など。

⁴⁶ I テモ3：4 (監督); 3：5 (監督); 3：12 (奉仕者)。ただしこの表現は、5：3以降に現れる「やもめ」に対しては用いられていない。理由として、もし2：12の「女性は静かにするべき」がそのままの形でやもめ職に適用されるなら、著者はやもめ職を含んだ女性一般に静寂を求めていることになり、自分の家を先導するような、静寂とまるでかけ離れた行為を望んでいないことが挙げられるだろう。

⁴⁷ イソクラテス『ニコクレスに与う』19; 『デモニコスに与う』35; プルタルコス『リュクルゴス』19; Euphronius, Fragments 4 など。ソポクレス『アンティゴネー』661f では、「すなわち、自分の家にあっても勤めを怠らぬ者なら、国に対しても同様正義を守ろう」(呉訳 [1961], 47頁) と記され、ギリシア・ヘレニズム世界で「自分の家の先頭に良く立つ」ことは、政治的活動をする上でも基本となる姿を示している。

⁴⁸ 我々の箇所におけるその他の具体的な「善い行ない」についても、全てにおいて社会的な倫理観に即したものである。このことに関する詳しい考察は別の機会に譲りたい。

- 1、έτεκνοτρόφησεν (子どもを育て上げた)
- 2、ἐξενοδόχησεν (部外者を受け入れた)
- 3、ἀγίων πόδας ἔνιψεν (聖なる者たちの足を洗った)
- 4、θλιβομένοις ἐπήρκεσεν (苦しんでいる人々を助けた)
- 5、παντὶ ἔργῳ ἀγαθῷ ἐπηκολούθησεν (あらゆる「善い行ない」に従った)

これらの具体的内容の中で我々が注目すべきものは、ἀγίων πόδας ἔνιψεν (聖なる者たちの足を洗った) である。その他の4つの「善い行ない」には、上述の3：2-7の「善い行ない」と同じく、キリスト教的な要素は感じられず、むしろこれらは社会的倫理観が反映された善行と言える⁴⁹。しかしながら ἀγίων πόδας ἔνιψεν だけは、この箇所の中でも異質の存在である。ἅγιοι (聖なる者たち) は明らかにキリスト教的な要素を含む表現であるし、パウロ自身が信仰者を指すときによく用いた表現でもある⁵⁰。ただし、「古代ギリシア・ローマ世界では、足を洗うという行為は、基本的に奴隷の務めであったが、妻や娘など家の女性が行うこともあった。またユダヤ教においても、夫の足を洗うことは妻の務めとされていた」⁵¹のであり、当時のギリシア・ヘレニズム世界において、あるいはユダヤ教的伝統において「足を洗うこと」は身分の低い者たちの仕事として認識されていた。従って「足を洗うこと」は当時において、社会的に認められた「善い行ない」、社会的秩序を保つための行ないとして考えられており、著者はこの表現に含まれた概念をキリスト教の枠組みの中へ持ち込む際に、パウロがよく用いた ἅγιοι という表現を加え、牧会書簡が表明する「善い行ない」として仕上げている。

このように、牧会書簡に現れる「善い行ない」には、元来はギリシア・ヘレニズム世界を中心とした社会的倫理観が反映された善行として考えられるものを、著者の手によって、表現に若干の修正を加えることも行なわれながらキリスト教の枠組みの中へ持ち込まれたものが存在する。

- (3) ギリシア・ヘレニズム的倫理観に基づく要素がキリスト教的に変換され、その上でパウロの「善い行ない」に特徴的な終末論的要素が含まれている「善い行ない」
(ここではIテモ 6：18を取り上げる。他に、IIテモ 3：17。)

⁴⁹ ἐτεκνοτρόφησεν は、子どもを育てない事例が問題視された当時の状況を反映していると考えられる。プルタルコス『モラリア』496 c には、「[古代のある人々]には、生まれた子を育てよう命じる法もな [い]」(戸塚訳 [2000], 210頁。なお、亀甲括弧内は本稿筆者による) ことが批判的に紹介され、「子どもの遺棄」の問題はギリシア・ヘレニズム世界において問題視されていたことがうかがえる。ἐξενοδόχησεν (部外者を受け入れた) は、ξένος (部外者) と δέχομαι (受け入れる) の合成語であるが、牧会書簡では類似の表現として φιλόξενος (部外者を愛す; Iテモ 3：2) が現れる。著者は書簡において、ξένος を排除することなく、むしろ丁重に扱う模範的態度を示している。θλιβομένοις ἐπήρκεσεν (苦しんでいる人々を助けた) で用いられている θλιβόμενοι (苦しんでいる人々) は、様々な事柄に苦しんでいる人々の様子を表すことができるが、著者はこの箇所、文脈的にも、キリスト教信仰に関わらない、一般的な生活困窮者を想定していると考えられる(この解釈をとる、辻 [2018a], 72-73頁に賛成)。また、この箇所の ἐπαρκέω (助けること) は、5：16 (bis) の用例と同じく、物質的な支援を想定されているとみて良い(この解釈の辻 [2018a], 72-73頁に賛成)。ἐπαρκέω の新約聖書での用例がIテモ 5：10, 16 (bis) の3回だけであり、5：16 (bis) がどちらも物質的支援が想定されていることもこの解釈の根拠となる。

⁵⁰ パウロの用例として、ロマ 1：7；12：13；15：25, 26, 31；16：2, 15；Iコリ 1：2；6：1, 2；14：33；16：1, 15；IIコリ 1：1；8：4；9：1, 12；13：12；フィリ 1：1；4：21, 22；Iテサ 3：13；フィレ 5：7。また第二パウロ書簡では、コロ 1：2, 4, 26；3：12；エフェ 1：15, 18；3：8；4：12；5：3；6：18；IIテサ 1：10。詳しくは辻 (2018a), 73-74頁、および74頁注28参照。

⁵¹ 辻 (2018a), 73頁。辻のこの意見に賛成。辻 (2018a), 73頁注30に典拠として挙げられているものは、プルタルコス『モラリア』249b；アレクサンドリアのクレメンス『綴織』(ストロマテイス) IV 19.123. 1；ヨセ・アセ 20：2-3；クトゥ (BT) 61a。

I テモ 6 : 18 (6 : 17-19)

¹⁷この世において富んでいる人々にしつこく命じなさい。高慢にならず不確かな富に希望を置かず、しかしながら私たちにすべてを喜びによって豊かに与える神に〔希望を置くように〕。¹⁸善を行い、「善い行ない (ἔργα καλά)」によって富み、気前よく分け与え、社会分配するように。¹⁹まことの命を獲得するために、将来での善い土台を自分たち自身のために備えるように。

この箇所は、I テモテ書の最後部にあたる。18節に現れる εὐμεταδότους εἶναι (気前よく分け与えること) および κοινωνικός (社会分配する) は、牧会書簡がエヴェルジェティズム (evergetism : 恩恵として与えられた富の分配行為) の影響を受けていることを示す⁵²。従ってこの箇所の ἔργα καλά は社会的な慈善行為を含んでいる可能性が高く、社会的倫理観に基づいた「善い行ない」という概念がキリスト教の枠組みへ持ち込まれた様子が分かる。ただし6 : 18の前後からも分かるように、この文脈は牧会書簡の終末思想が色濃く反映されている。すなわち、17節の μηδὲ ἐλπίζειν ἐπὶ πλούτου ἀδηλότητι (不確かな富に希望を置かない) に現れる πλοῦτος (富) は、「この世において富んでいる人々」が持つこの世における富を指しているが、この世的な富を否定し、将来起こると著者が考えている終末に備えて、天に富を備えることが示されている⁵³。以上のように、6 : 17-19が置かれた文脈には著者の終末思想が色濃く反映されている⁵⁴。従って我々の箇所の ἔργα καλά には終末時のために備えるべきものであるという、パウロ的な「善い行ない」の概念が継承されており、そこに著者の思想 (終末時に向けて備えるべきキリスト教のエヴェルジェティズム) が加えられていると言える。

(4) 信仰定式というキリスト教的な文脈の中で著者自身の主張が加えられている「善い行ない」(ここではテト 2 : 14を取り上げる。他に、テト 1 : 16 ; 3 : 14。)

テト 2 : 14

¹⁴〔イエス・キリストは〕 私たちのために自らを与えた。というのも、彼は私たちにあらゆる不法から身代金を払って解放し、彼自身のために特別な民⁵⁵、「善い行ない (ἔργα καλά)」の熱心さにある民を聖別するためであった。

⁵² 牧会書簡の背後にあるエヴェルジェティズムの存在を否定する主張もある。Williams (2014), 157-159にこれに関する議論が詳しく述べられているが、Williams 自身もエヴェルジェティズムの影響を否定する立場にある。Williams は、I テモ 6 : 6-11で富よりも義の追求が強調されていること (158)、6 : 18の「気前よく分け与えること」において、必ずしも市民的慈善行為が想定されるとは限らないこと (158) 等を根拠として提示している。つまり、Williams は牧会書簡の記述をそのままの形で受け取っていることになるが、果たしてそうであろうか。我々はこれまでの考察 (本稿第2章) の中で頻繁に、牧会書簡がギリシア・ヘレニズム的倫理観のキリスト教的解釈への変換を通して、著者の考えるキリスト者としての「模範的」、あるいは「理想的」姿が投影されていることを確認してきた。このことを含めて考えるならば、著者は牧会書簡に現れる善行を、極めて理想的に描写している可能性が非常に高いと言える。従って Williams のような主張は、これまでの我々の積み重ねた考察を通して、蓋然性が極めて低いと言える。

⁵³ また19節に現れる ὄντως ζωῆ (まことの命) は文脈上からしても明らかに「永遠のいのち」を指しているし、同じ節の θεμέλιος καλός εἰς τὸ μέλλον (将来での善い土台) は将来起こる終末での善い土台を指している。

⁵⁴ また19節の θεμέλιος καλός は、同じ καλός が用いられた直前18節の ἔργα καλά との関係から、「善い行ない」を指していることが分かる。

⁵⁵ 新共同訳は、この箇所に現れる「特別な民 (λαὸς περιούσιος)」を訳していない。しかし実際のところ、「特別な民」という表現は『「善い行ない」の熱心さにある民』を強調する表現であり、「善い行ない」がキリストにとってどれだけ「特別な」のかが示されているため、必ず訳さなければならない。この「特別な民」という訳語に関して、田川 (2009), 770頁参照。

この文脈で著者は、イエス・キリストが「私たち」を *ἔργα καλά* の熱心さにある民として聖別すると語っており、*ἔργα καλά* は我々を聖別するための基準として現れている。つまり *ἔργα καλά* は、キリストが我々の人間性を判断する材料となっており、ここでは特に「善い行ない」が贖罪の理由として表されていると言って良いだろう⁵⁶。またこの14節は、初期のキリスト教の信仰定式から来ていることが指摘されるが⁵⁷、その信仰定式に、元来はない「善い行ない」という概念を著者が持ち込んでいるため、著者はこれをアレンジしていると言える⁵⁸。従ってこの箇所には初期のキリスト教の信仰定式が持ち込まれているが、同時にその定式に付け加えがなされ、著者の主張が行なわれており、その中で *ἔργα καλά* はキリストの贖罪の理由として響いている。

(5) 終末論的なものとヘレニズム的な意味内容が混在している「善い行ない」
(ここではIテモ 5:25を取り上げる。その他に、IIテモ 2:21。)

Iテモ 5:25

²⁵そして同じように諸々の善い行ないも明らかである。そして反対の場合でも隠すことはできない。

直前の24節で、「人々の罪」によって、ある人々はすぐに裁きに入ると、そしてその他の人々の罪が後に明らかになると言われ、我々の箇所へと続いていく。従って、「罪」という概念との関連性が考えられる。24節の「裁き (κρίσις)」という言葉からも終末論的な思想が含まれていると考えられる⁵⁹が、22節の「純潔でいるように (ἀγνός)」という言葉の流れからも、倫理的な意味も少なからず含意されているだろう。従って終末論的な要素と倫理的な要素が入り混ざった「善い行ない」と言えそうである。

以上のように、牧会書簡の「善い行ない」に定まった概念があるわけではなく、すべての箇所においてパウロ的、キリスト教的な要素が反映されているわけではないが、全体的に見るならば、ギリシア・ヘレニズム的要素とパウロ的な終末論的要素、あるいはキリスト教的な要素が混ざり合いながら含意されていると言えるだろう。

また牧会書簡において *ἔργον καλόν* と *ἔργον ἀγαθόν* がどちらも見受けられることは次の点で説明できるだろう。すなわち、パウロが用いた *ἔργον ἀγαθόν* を継承しつつ、「どちらかといえば賞賛すべき行為において現れ出る善を表して」⁶⁰いる *καλός* を用いた *ἔργον καλόν* をも用いているのである。従って *ἔργον ἀγαθόν* /

⁵⁶ 14節に「[イエス・キリストは] 私たちのために自らを与えた」、および「彼は私たちをあらゆる不法から身代金を払って解放 [するため]」という表現があり、この表現は贖罪としてのイエス・キリストの十字架の出来事を表している。

⁵⁷ Towner (2006), 759-766および, Marshall (2004), 285-286参照。この信仰定式は、例えばマコ10:45に見受けられる(他に、ガラ1:4; エフェ5:2; およびIテモ2:6など。詳しくは、Towner [2006], 759参照)。このマルコの箇所ではイエス・キリストが「そしてなぜなら人の子は奉仕されるためではなく、しかし奉仕するために来たのである。また彼の命を多くの人々のための身代金として与えるために [来たのである]」と語られているが、この「彼の命を多くの人々のための身代金として与えるために」という表現が初期のキリスト教の信仰定式となった。

⁵⁸ テトス書がマルコ福音書の形と決定的に異なるのは、定式の後に「*ἔργα καλά*」の熱心さにある民を聖別するため」という表現が牧会書簡の著者によって加えられていることである。この表現に似た「善 (*ἀγαθός* あるいは *καλός*) への熱心さ」という表現はIペト3:13やポリュ・フィリ6:3などに見られる (Marshall (2004), 286, n. 167参照) が、善ではなく「善い行ない」とされていることは牧会書簡の著者によるものであるため、キリストが自らを身代金として支払ったことの原因として、「私たち」において「*ἔργα καλά*」の熱心さにある民を聖別するため」ということが著者の伝えたい主張として存在していることになる。

⁵⁹ 辻 (2018b), 73頁は、21節の「神とキリスト・イエスと選ばれた天使たち」という表現からも終末論的な響きがあることを指摘している。

⁶⁰ 本稿注16参照。

καλόνの2つの「善い行ない」の表現が、2世紀はじめ頃に成立した牧会書簡においても見受けられるのである。

第3章「善い行ない」における牧会書簡の著者の戦略

本稿第1章において、パウロに特徴的な「善い行ない」という概念は、「終末時の救いとの関連」によることが明らかにされた。他方本稿第2章では、牧会書簡の「善い行ない」にはパウロ的要素とギリシア・ヘレニズム的な一般社会の倫理観に基づく要素が両方とも反映されていることが明らかにされ、パウロ的要素には著者の主張を込めて発展させているように見受けられる箇所もあった。では牧会書簡の著者は、なぜパウロの「善い行ない」という概念のみを継承することはせず、自身の主張を込めて発展させ、さらに一般社会の倫理的要素を強く反映させたのだろうか。

我々はこの問題を解決するために、牧会書簡の「読者」について考えたい。ここで詳しく立ち入ることはできないが、おそらく牧会書簡の成立場所はエフェソであると考えられる⁶¹。しかしながら使徒言行録やパウロ書簡には現れない「クレタ」という地名（テト1:5）はIテモテ書（および牧会書簡全体）の内容が「エフェソに限定されるものではなく、他の地域の教会にも広く妥当するものであることを示す役割」⁶²を果たしており、著者は様々な地域の（パウロ系統の）教会で読まれることを期待していたと考えられる。つまり、牧会書簡の「読者」はエフェソをはじめとした広い範囲の教会におり、それらの教会の「読者」の中には著者が牧会書簡で取り上げる重要なテーマの1つとしても存在する、著者の教えとは一致しない「異なる教え」⁶³を行う人々も含まれていると推測される。従って著者は、「読者」として存在する「異なる教え」による人々に、牧会書簡を通して自らのパウロ理解に基づいた「パウロ」の主張の「修正」、およびキリスト者として教会外の人々から異質な存在として思われたいこと⁶⁴を含めたキリスト者としてのあるべき姿を表明、および「宣伝」し、キリスト者としての一致を図ることを目的にしたのだと考えられる。そのためには、牧会書簡が成立したと考えられるエフェソだけに通用する内容ではなく、他の地域の教会にも通用するものでなければならなかったのである。著者は、当時の教会が強く影響され、かつそれらの教会の人々が生活し親しんでいた世界、すなわち紀元後100年前後の「ギリシア・ヘレニズム世界」の倫理観に基づいて発言することを選んだ。その際、著者はギリシア・ヘレニズム的な一般社会の倫理観に基づきながらもそれらの倫理観をキリスト教的に変換し、あくまで意味内容はキリスト教化されたものとなっている。つまり牧会書簡の中身は、土台と柱は一般社会のものであるが、内容は「パウロ」的、もっと言えは著者のパウロ理解に基づいて「修正」された「パウロ」的主張が含まれている。このことは、我々のテーマである「牧会書簡の『善い行ない』」においても当てはまる。著者は「善い行ない」を通して自身の神学的主張、およびキリスト者としてのあるべき姿を表明している⁶⁵が、その主張の土台や柱はギリシア・ヘレニズム的なものであり、著者は自身の「パウロ」的主張の「宣伝」という目的のもと、1つの戦略として、「読者」にとって親しみ深い一般的な内容や話、あるいは善行を持ち出し、自身が伝えたい牧会書簡としての「善い行ない」という概念を語っているのである。我々は牧会書簡の「善い行ない」を、牧会書簡がより広い地域で、より多くの人々に読まれるために著者が用いた、1つの「戦略的な道具」として読み取ることができる。

⁶¹ 特にIテモテ書においては、宛先としてのエフェソの教会の状況が反映されている。辻（2003）、327頁参照。

⁶² 同書、326頁。

⁶³ Iテモ1:10; 4:1-2; 6:3; IIテモ4:3; テト1:9; 2:1で描写されている状況は、著者の思想とは異なった教えの存在を示唆し、著者の関心が「異なる教えに対抗すること」にあることを表している。

⁶⁴ Iテモ3:7（「外部から良い証言があること」）。

⁶⁵ 本稿第2章参照。

結論

以上の考察から、我々は次の結論を導き出すことができる。

- 1、*ἔργον καλόν* と *ἔργον ἀγαθόν* は牧会書簡の時代には同義語として用いられているが、パウロは *καλός* の元来の意味から、見た目の善い行ないというニュアンスになりかねないため *ἔργον καλόν* を用いていない。そのため彼は *ἔργον ἀγαθόν* のみを使用しているのだろう。牧会書簡の著者はパウロが用いた *ἔργον ἀγαθόν* を継承しつつ、ギリシア・ヘレニズム的な *ἔργον καλόν* をも用いているのである。
- 2、パウロが考えている *ἔργον ἀγαθόν* には、そのすべての箇所ですべて「終末時の救いとの関連」が考えられる。
- 3、牧会書簡に現れる「善い行ない」には、定まった概念はない。ただし、著者は、「善い行ない」の使用において、パウロの終末論的要素を継承している（I テモ 5 : 2 ; 6 : 18 ; II テモ 2 : 21 ; 3 : 17 ; テト 3 : 1）が、著者によってその概念は発展されている。またほとんどの箇所ですべて、ヘレニズムの一般的な倫理観による影響、およびその一般社会の倫理観をキリスト教の枠内に持ち込んで見受けられる。
- 4、このような牧会書簡の「善い行ない」には、自らのパウロ理解に基づいたパウロの発言の「修正」という著者の主張の「宣伝」を目的とした、1つの戦略が影響していると考えられる。すなわち著者は、牧会書簡の「読者」が親しみ深く接しているギリシア・ヘレニズム的な「善い行ない」の概念を用いながらその概念をキリスト教的に変換し、より広く、多くの人々に自らの主張を通した牧会書簡が読まれることを目指した戦略的な試みを行っている。「善い行ない」はそのために用いられた1つの「道具」として存在している。

我々は、以上の結論に至り、パウロの *ἔργον ἀγαθόν* の継承部分を考えながら、牧会書簡の「善い行ない」に込められた著者の戦略を明らかにすることができたと思われる。著者が書簡に含んだ、「善い行ない」という1つの概念においてもこのような戦略が見られるため、著者は非常に巧みに、かつ非常に戦略的に牧会書簡を執筆し組み立てていたことが推測される。その上で我々は、パウロの時代から半世紀近く経った激動の時代をキリスト教がいかにして生き延びようとしたのかを、「善い行ない」という表現から考えることができたと思われる。

参考文献

- Anton, P., *Exegetische Abhandlung der Pastoral-Briefe Pauli an Timotheum und Titum* (Band I; Halle: Verlag des Wäysenhauses, 1753).
- Dibelius, M. / Conzelmann, H., *The Pastoral Epistles* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress Press, 1977). [Dibelius]
- Downs, D. J., *The Offering of the Gentiles* (Grand Rapids / MI: Eerdmans, 2016).
- Dunn, J. D. G., *Romans 1-8* (WBC 38A; Dallas / TX: Word Books, 1988).
- Lohse, E., *Der Brief an die Römer* (KEK; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1963).
- Marshall, I. H., *The Pastoral Epistles* (ICC; London: T&T Clark, 2004).
- Ottenheijm, E., "The Phrase 'Good Works' in Early Judaism. A Universal Code for the Jewish Law?," *Empsychoi Logoi - Religious Innovations in Antiquity. Studies in Honour of Pieter Willem van der Horst*, ed. A. Houtman (Leiden; Brill: 2008, 485-506).
- Schnelle, U., *Einleitung in das Neue Testament* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2017).
- Schnelle, U. / Strecker, G., *Neuer Wettstein Texte zum Neuen Testament aus Griechenland und Hellenismus*. (Band 2, Texte zur Briefliteratur und zur Johannesapokalypse; Berlin / New York: De Gruyter, 2001). [Neuer Wettstein]
- Sheldon, M. E., *A Theology of Good Works. The Apostle Paul's Concept of Good Work within the Context of Second Temple Judaism* (Liberty University Baptist Theological Seminary, 2015).
- Towner, P. H., *The Letters to Timothy and Titus* (NICNT; Grand Rapids / MI: Eerdmans, 2006).
- Williams, T. B., *Good Works in 1 Peter* (WUNT 337; Tübingen: Mohr Siebeck, 2014).

Zeller, D., *Der Brief an die Römer* (RNT; Regensburg: Verlag riedrich Pustet, 1985).

ヴィルケンス, U. (岩本修一訳)『ローマ人への手紙(1-5章)』(EKK 新約聖書註解 6 / 1 ; 教文館、1984年)。

大貫隆『終末論の系譜—初期ユダヤ教からグノーシスまで』(筑摩書房、2019年)。

川島重成『ロマ書講義』(教文館、2010年)。

クランフィールド, C.E.B. (山内眞訳)『註解 ローマの信徒への手紙』(日本キリスト教団出版局、2020年)。

佐竹明『第二コリント書 8-9章』(現代新約注解全書; 新教出版社、2017年)。

新日本聖書刊行会編『聖書 新改訳2017』(いのちのことば社、2017年)。^[新改訳2017]

ソボクレス (呉茂一訳)『アンティゴネー』(岩波書店、1961年)。

田川建三『新約聖書 訳と註 第四巻』(作品社、2009年)。

辻学「新約釈義 第一テモテ書 14」『福音と世界』2017年4月号、72-79頁(新教出版社、2017年)。

—「新約釈義 第一テモテ書 25」『福音と世界』2018年3月号、72-79頁(新教出版社、2018年)。^[2018a]

—「新約釈義 第一テモテ書 29」『福音と世界』2018年7月号、72-79頁(新教出版社、2018年)。^[2018b]

—「新約釈義 テトス 8」『福音と世界』2019年11月号、72-79頁(新教出版社、2019年)。

—「牧会書簡 テモテへの手紙一、二、テトスへの手紙」『新版 総説新約聖書』315-340頁(日本基督教団出版局、2003年)。

—『偽名書簡の謎を解く—パウロなき後のキリスト教』(新教出版社、2013年)。

日本聖書協会『聖書新共同訳』(日本聖書協会、1987年)。^[新共同訳]

—『聖書』(日本聖書協会、1955年)。^[口語訳]

プルタルコス (戸塚七郎訳)『モラリア 6』(西洋古典叢書; 京都大学学術出版会、2000年)。

保坂高殿訳「テモテへの第一の手紙」新約聖書翻訳委員会『新約聖書 V パウロの名による書簡 公同書簡 ヨハネの黙示録』、44-60頁(岩波書店、1996年)。^[岩波訳]

松田伊作訳『詩篇(旧約聖書翻訳委員会編 旧約聖書 XI)』(岩波書店、1998年)。^[岩波訳]

Wanke, J., 「καλός」 荒井献/マルクス, H. J. (編)『ギリシア語 新約聖書釈義事典 II』295-297頁(教文館、2015年)。